



TITLE:

観測部より

AUTHOR(S):

CITATION:

観測部より. 天界 1927, 7(77): 349-349

ISSUE DATE:

1927-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161132>

RIGHT:

觀 測 部 よ り

黃 道 光 を 見 る

當地では、獸帯光は三月四月の宵には鮮明に觀測されます。此の頃は金星を包んで、すつと中天までのびて見えます、最高點は日没後に黃昏の光も消えて、星の姿が鮮明に見えて來る頃、當地の時刻に於て午後八時頃、殆んど子午線から西までの三分の一までも及びます。つまり西から子午線まで測つた三分の二位伸びて輝きます。二月頃から追々鮮かさを増して來ます。三年程前から興味を惹いてそれを見て居りました。當地は地上の空氣が清潔な故だらうと思ひます。一年中觀測の出來ないの先づ秋の宵と春の曙とです。つまり黃道(黃道が張り出した曲線の頂點)と地球と、太陽との三點を連れた三角の頂點が鋭い程よく見えて鈍角になると見えないので地球から見た時には遠日點の側が觀測に適するのかと思はれて觀測に興味をひきました。それで春は宵に秋は曙によくみえてそしてその反對の時刻には見難いものだと思つて居ります。

仲々よく見えます。會員諸君が咸北に旅行される折もあらば御注意下さい。晴れた天空に、その相當な時刻になれば、なかなかよく見えて、印度洋あたりでなければ(?)見られないやうな感じがするでせう。此の黃道光の中で金星が輝いて居たり、もうその頃だと思ひつゝ西天低く模索して居ると、思つたあたりに水星を見つけ出すなどは、恰も専門天文學者が彗星を追索する時の心地と同じだらうと思ひます。

何時だつたか、金星が曉の明星で役を勤めてゐる頃、狼が鳴吠する山小屋に居て、凍つた樹氷が淡く映する時に、此の黃道光をなつかしく眺めたことがありました。大正十四年の晩秋でした?その頃金星と水星と土星?が黃道光に伴はれて、美を競ふて居るのを自分は、白い息を吐きながら見たことがあります。事實咸北では、空氣の加減が大に觀測を助けて半年(約五ヶ月)は宵に半年(約五ヶ月)

は曉に之れを見ることが出來ます。

その頃日の出(没す)る所から黃道に沿ふてその輪廓は圓錐曲線を形成して内方に向ふ程輝が強くなつて、時には天の川の射手座邊の様に輝く時もあります。

咸鏡北道、淺野生

急告 觀測の發展を望み、事業の獎勵と、部員の新募集のため今般、觀測部費を毎月金50錢から15錢に引き下げた。之れは本年7月から實行する。此の機會に、觀測部の要領を摘記すれば、

觀測部員——本會會員中より申出たものに限る。人數に制限なし。

次ぎの6課に分れてゐる。但し同一人が種種の課の仕事をするも差支なし

- (1)流星課……課長は中村 要氏
- (2)彗星課……同
- (3)變光星課……同
- (4)太陽課……同 山本一清氏
- (5)黃道光課……同
- (6)豫報課……同 上田 穰氏

部員はプレテン(英文報)の無代配布を受け、又、實地觀測上の指導を受け、又隨時發行の印刷物を受く。

目下、部員は約100名であるが之れは是非もつと増したい。殊に全國の我が會員中、大小の望遠鏡などを持つてゐる人々は、部員となつて大に觀測を勵んで貰ひたい。

豫報課の事業として本年度から「天文年鑑」を發行する豫定で、年初から準備中であつたが印刷所との交渉渉らず、最近遂に之れを中止するの止むをなきに至つたのは遺憾である。従つて此の年鑑の初號は來年度よりとして多分本年11月頃に發行される筈。